
雨降ったら、傘持ってったるわ。

安田つばさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雨降ったら、傘持ってたるわ。

【Nコード】

N3817Z

【作者名】

安田つばさ

【あらすじ】

慶一と光という、正反対の性格を持つ兄弟の、屈折した兄弟愛の話です。よかつたらごらんください。

1・さびれた職場（前書き）

慶一と光という、現代にありがち……だけどちよつとずれて屈折した兄弟の、素直になれない兄弟愛と恋愛を混ぜたお話です。

最近このサイトを始めたばかりで、使い方があまりよくわかっていないので、不備がございましたらご連絡いただけると嬉しいです。感想などもいただけると今後の参考にさせていただきますので、よろしく願います（^^）v

それでは軽〜いお気持ちでページを進めてください

1・さびれた職場

俺とあいつは、一言で言うとな仲。
いや、不仲と言ってもまさか殴り合いの喧嘩をするわけでもない。
なんだろう……とりあえず、あいつが俺を「兄貴」と呼ぼうとも、なんの感情も湧かないのだ。

昼下がりの路地裏の古びた喫茶店…
そこが俺の仕事場。

昼下がりの路地裏の古びた喫茶店…しかもなぜか人間一人いない土地で、よく「やっていけるのか。」という冷やかしを、通りすがりの人間に投げかけられる。

確かに。それ、正論。

だいたい、こんな最悪の立地条件に客商売を始めようとしたマスターに疑問を感じる。

もはや勇者レベルの決断。

しかしそんな勇者レベルのマスターのもとに、よく常連は「天使が来た。」という。

週3でバイトに来ている、女子大生の愛ちゃんの事だ。

愛ちゃんは、彼女が高校入学の頃から店で働いている。

しかし俺には、なぜ愛ちゃんがこんな古びた喫茶店で働き続けるのか、いまいわからない。もっと時給がよく魅力的な店はあるだろうに。

愛ちゃんに聞くと、いつもそのアイドルのような笑顔で、「落ち着

くんです。働きたいから働いているんですよ?」と言い、「慶一さんはどうしてこのお店で働き続けるんですか?」と聞いてくる。それは俺にも全くわからない。変な愛着でもあるのだろうか。

なぜ愛ちゃんがこの店の天使かというと…

愛ちゃん狙いでこの店に来る常連…つまり愛ちゃんファンが少なからず存在するからだ、と俺は思っている。

なんたって、愛ちゃんが出勤している日は例え客足が極端に少ない夜の7時くらいでも、まず客足が途絶えることはない。

しかし、他の曜日は閑古鳥も鳴けないほどにさびれてしまうようだ。

きつと、この店は愛ちゃんに救われていて… まずマスターも変なかぶり物をする前にそこに留意し、感謝することが必要だと、俺は遠まわしに言い続けているがその気配は一向にないようだ。

2・光の来店

そんなちよつと…というかだいが変なマスターと、アイドルチックな愛ちゃんと、古びた埃臭い喫茶店で俺は働いている。

「慶一さん、エスプレッソ2杯お願いしまーす！」
俺は愛ちゃんの声ではっとした。

「了解ー。」近頃やつと導入したエスプレッソマシンに手をかける。この古びた喫茶店で、このエスプレッソマシンだけが唯一『今』を、忘れそうになる人間に伝えてくれる。

(そろそろ来るか…) 壁時計を見上げた瞬間だった。

「兄貴!!!!!! 来たったで!!!!!!」

残念ながら…ぴったりだった。

【奴】の、常連客に遠慮する景色もなく、大音量の中途半端な関西弁が、喫茶店の木造の壁に吸収されていった。
俺は確実に聞こえていたが、あえて無視をする意向でエスプレッソマシンに再び向き合う。

喫茶店が一瞬水を打ったように静かになったが、徐々に元の会話の音が戻ってくる。

「兄貴！」

「…聞こえてるよ。」

あんまりにもしつこいので仕方なく顔を挙げずに小声でつぶやく。

「おったおった。地味すぎて気づかへんかったわ」

【奴】はなお大音量でケタケタと笑う。

俺はイラっとしたので、つい砂糖の陶器の壺を強くカウンター席に叩きつけた。【奴】：つまり一応俺の弟ってことで役所が認めているの光は前歯で下唇を噛んで笑った。

上層の上の小さなほくろが余計に目立つ。これが女の子には「かわいい」とモテるらしい。本人談だから確証は全くないけれど。

「あら、弟さん。」エスプレッソを取りにきた愛ちゃんが光に気づいた。

「愛ちゃん元気??ってかちょww『弟さん』ってやめてよ〜いい加減名前覚えてよ。」

なお俺は次は業務用の特大の冷蔵庫に向き合う。

(弟さん…か。弟さん…ね)俺は心の中でつぶやき、失笑した。

3・慶一の回想

実はなんというか…

俺と光は確かに…本当の兄弟じゃない。

だけどそれが『性格の不一致』に繋がっているわけではないと思う。

正直言つと…なぜ俺が光をつつとつしく感じるのかはわからない。

本当の母親は、親父の借金のせいで、俺が小学生の時に、身一つで家を飛び出したまま、未だに帰ってこない。

マザコンだった俺は、母親が家を出たことよりも自分を連れていかなかったことにショックを受けた。

その後は大した記憶がない。楽しい記憶も悲しい記憶も。

そして数年後、親父は借金を返し、新しい女…つまり今の母親と結婚して、その息子が光だった。

光は最初からあんな軽いやつだった。

一瞬「弟ができる」と聞いて喜んだが、また俺は家族に心を閉じた。そのまま今に至るのだから、当たり前だが高校卒業とともに家を出たきり、帰っていない。

今の母親は意外にも優しい人間で未だに電話があるが、実の父親にいたってはメールすらない。

回想に夢中になっている間に、愛ちゃんと光は話に夢中になっていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3817z/>

雨降ったら、傘持ってたるわ。

2012年1月6日01時52分発行